

平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	名古屋市立 高針小学校	氏名	松本 隆史
-----	-------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

わが子の寝顔を見ていると、ふと思う。「この子の未来が持続可能なものであってほしい」と。私はエジプトで、今までの政治体制が音を立てて崩れていく中、平和に見えた日常が失われることへの無力感を味わった。そして、その1か月後には日本で大震災。自分も含め多くの人が、その大切さを有難がることなく過ごしている、とても有難い日常が持続することは絶対ではない。昨年度、社会科の産業学習を通しての持続可能な社会の在り方をどう子供に考えさせるかを研究した。その一環で、東北大学を訪問し、持続可能な近未来社会創造への取り組みが我が国で始まっていることを知った。

そして、本年度の教師海外研修。本研修に参加させていただいた目的は、「持続可能な開発」の生の姿を五感で体験すること。持続可能な社会を創造するために、様々な工夫や努力をしている人に出会い、その生き様を知り、感じる。ラオスの開発課題と我が国の開発課題の共通点を発見し、解決の道筋を考えること。ラオスで感じたこと・知ったこと・発見したこと・理解したこと・考えたことを教材となるように日本に持ち帰ることであった。仲間と共にした貴重な経験と現地研修の成果を活用し、持続可能な未来の創造に参画することができる力を育成する教育活動を実践することで、持続可能な未来の創造に微力ながら参画できることをうれしく思う。世界中の人々が幸せな夢を見られますように。コブチャイ、ラオス。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1 「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

セントレアからタイのスワンナプーム国際空港を経て、ビエンチャン・ワットタイ国際空港まで12時間。夜10時、ホテルに到着。早速、円・ドル・Kipの両替に困惑するも、5枚の100ドル札が401万3500Kipという札束へ変貌したことに興奮。現地物価調査のため、Kipを握りしめ、階下のレストランへ。後15分でクローズのはずだったけれど、満面の笑顔で迎えてくれたマスターの優しさ。初めて味わうラオスの味。のどを潤すビアラオに移動の疲れは緩やかに溶けていくように感じた。

衣食住、医食同源というように食は人の生活の基本である。ラオスは豊かな食を楽しめる国であった。ティップ・カオを開けると、そこにはこんもりと盛られたもち米カオ・ニャオ。おかずも豊富であった。ひき肉を香草で炒めたラップ、辛いけれど癖になる青パパイヤのサラダ、ルアンプラバンで頂いたソーセージ、メコン川を眺めながらのナマズ料理、オシャのチキンチャーハンとフライドチキン、優しい味の豆腐とタケノコなどの野菜たっぷりのスープ、ゴマの風味とパリッとした食感が魅力の川ノリ、からし味噌も癖になる味。国土の大部分を覆う森林と南北を流れるメコン川という「自然」がもたらしてくれる「食」を、「家族」や友人・知人と、時間をかけてゆっくりと楽しむ暮らし。そんな中から、ラオスを巡る中で感じた家族の絆は作られてきた。今後予想される急激なグローバル化の中でも、「自然」「食」「家族」、人の「優しさ」は、持続してほしいラオ

スの魅力である。いつかラオスを旅したとき、魅力に再会することが楽しみだ。サバイディー、ラオス。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ついにラオス到着。ワットタイ国際空港から踏み出した私たちを出迎えてくれたのは、南国特有の空気と、ラオスと日本の国旗であった。その国旗に見送られ、ビエンチャン1号線を通り、市街地にあるホテルに向かったのだが、その空港と幹線道路はODAによって建設されたものである。さらに、ラオスは電力を100%自給し余剰電力は隣国へ輸出している。そのメコン地域電力開発プロジェクトにも我が国は支援を行っている。ラオスの経済発展のためのインフラ整備や、ごみ処理等の環境、不発弾の除去、教育の改善、農業の発展と森林の保全、保健医療の質の向上など、ラオスの人々の生活に関わる多くのことに日本は関わっており、ラオスと深く広く長くつながっているといえる。また、その支援の現場には必ず人がいる。専門家や青年海外協力隊、JICA職員、NGOの方々もラオスの人々と人とのつながりを作っている。そのつながりがうまくいっているからこそ、様々なプロジェクトを円滑に行うことができる。そして、そのプロジェクトによって解決しようとしている課題はどれも、日本にも当てはまる課題である。研修最終日の報告会で所長さんが次のようなことをおっしゃった。「ラオスへの支援は双方向の支援である。青年海外協力隊はラオスのコミュニティーから多くのことを学び、任期終了時には一皮も二皮も成長している。ラオスに人材を育成してもらっているのだ。」グローバルにつながった異なる国は、それぞれが素晴らしい魅力をもつと同時に、それぞれが解決すべき共通の視点の課題を抱えているのだ。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

「ラオスではUXOで多くの人々が被害にあっている、日本でもUXOで大きな被害が出ている」40年間、日本で暮らしてきたが、ラオスで初めて気付かされたことであった。不発弾による事故の防止・インフラの整備・伝統産業の保護育成・若者の就業・子どもの教育・障害者の支援と自立・医療の改革・介護・環境の保護と開発・ごみ処理、これらの課題は日本がラオスに支援しているものである。しかし、どの課題も日本が解決しなければならない課題でもあることに気付かされた。支援のイメージは、「もてる者が、もたざる者へ、自己のもっているものを与え、もたざる者を助けること」であろう。しかし、日本のラオスへの支援は、ラオスに寄り添うこと、相手を肯定的に理解することから始まる。そこで、他者を肯定的に理解するためには自己を肯定的に理解しなければならない。つまり、ラオス理解は日本理解でもある。互いを肯定的に理解した上で、その魅力を持続させ、課題を解決するためには何が必要かを考える。先進国として解決策を提示し発展途上国を発展させるのではなく、互いに認め合うもの同士が、互いに共通する課題について話し合い、互いの考えを出し合う中から、当事国が自力でやっていける解決策を作り出す。そして、その解決策をもとに、ラオス人が自分自身の手でラオスをつくり、日本人は自分自身の手で日本をつくる。グローバルな世界の中で、アイデンティティをもったインターナショナルな国へと、ラオスも日本も、互いの持ち味を生かしながら、課題を解決し、持続可能な魅力的な国へと成長できるはずだと思った。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

① 問題に対する当事者の言い分を傾聴する → ② 当事者の立場に立ち共感する → ③ 問題解決に際して、自分ができることと当事者ができることを話し合い、解決のための計画を立て、役割を分担する → ④ 当事者が中心となり、互いに協働し、問題を解決する → ⑤ 当事者が自立する これは、問題を抱える子どもや保護者に対する教師の問題解決のためのプロセスである。JICAの支援活動のプロセスと同じなのではないだろうか。教育も国際協力も相手の成長を願って行われる行為である。自分の考えを押し付けない相互支援を今後も持続させてほしい。

国際協力が相手国の利益となっていることは分かりやすい。しかし、日本の利益ともなっていることに気付いている国民は少ないのではないだろうか、積極的かつ謙虚に、国民に相互援助と相互利益をアピールする視点もあるといい。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

④ 短期職業訓練トレーナー育成のための職業訓練プロジェクト／IV-JAPAN

「汚れた衣類を手で洗うことと電気洗濯機で洗うことはどちらが優れているか」と聞かれたら、あなたは何と答えるだろう。IV-JAPANを設立した富永さんは、「なぜ、海外の途上国に支援をする必要があるのかを日本の子どもに教えられる、日本の子どもが考えることができるものをラオスから持って帰り教材化してほしい」とおっしゃった。30年近く、若者の自立を支援してきた富永さんはパワーと優しさがあふれ出る女性である。その富永さんの元気の源は、技術をつけ自立しようと努力する若者たちの姿。若者の多くは1年以内に手に職をつけ、その内の25%が起業するのである。何とバイタリティある若者だろう。富永さんは支援してあげるといふ気持ちは全くなく、手に職をつけて巣立ってくれたことがうれしい、感謝されることが有難いという。若者の自立が富永さんの元気の源なのだ。子供の成長から力をもらい、更なる努力をしようとする教師と同じであった。(松本隆史)

⑦ 托鉢

早朝のブランプラバン。朝もやの中をやってくるオレンジ色の行列。頭を剃り、オレンジ色の袈裟を着た裸足の僧侶が肅々とやって来る。先頭は年長者、後ろに行くにつれて小さくなっていき、最後尾は小学校低学年位であろうか、少し早足で遅れないようについて来る。ラオスでは出家して修行する人も多い。早朝の托鉢はその修行の一環である。村の人々は自分が作ったきれいで清潔なものを僧侶のもつ銀の容器に入れる。その時には、膝立ちの状態で声を出さずに行う。托鉢で得たものが僧侶の朝食となるのだ。さらに、村の人々が順番で毎日の食事を寺に届ける。また、ラオスの家々、メコン川を走る船の舳先、車のダッシュボード等には神棚のようなものにお菓子や花が供えてある。街角や玄関先にはミニチュアサイズの家が建っており、きれいな花が立体的に左右対となって飾られている。精霊信仰（アニミズム）と仏教が融合し、自然の中で生きるラオスの人々の暮らしは自然自体が崇拜の対象であるアニミズムや、先祖を敬う仏教と極めて自然に結びついていた。両手を合わせ、相手の目を見て笑顔で「サバイディー」と言ってくれるラオスの人々の優しい眼差し。日本に持ち帰りたと思った。(松本隆史)

⑧ ルアンプラバン教員養成短期大学（数学授業、研修中の先生たちとの交流など）

数学の授業を受ける真剣な眼差し。その先にあるのは、向き合っている子どもの生きるラオスの未来の姿であろうか。教育は国家100年の計という。持続可能な豊かな国を作っていこうとすれば、将来を見通した国づくりを進める必要があり、そのためには未来を生き、未来を作っていく子どもにどのような力をつけるのかビジョンをもたなければならない。子どもに夢をもたせなければならない。ラオスの小学校教育の重点目標は、1、礼儀作法・2、知識の習得・3、労働・4、美術・5、体育である。1、道徳教育・2、基礎的な知識の定着とそれを活用した問題解決・3、生きる力・4、豊かな人間性・5、健康と体力の向上を目標としている日本と非常に似ている。ここにもラオスと日本の同一性を発見できた。（松本隆史）

⑬ 少数民族の村

日本では少数民族というが、ラオスでは各民族というそうだ。その表現の違いに、自分とは異なるものをどのように受け入れているのかが分かる。ラオスには49の民族がすんでいる。人口が多いのは、女性がシンをはくラオ族であり、そのシンは機織で作られている。糸を紡ぎ、機織ができることは女性の必要な能力であり、家族が身に着けるものは女性が織っていたそうだ。今回、訪れたのは山岳地帯にすむモン族とヤオ族の村。ヤオ族の家には漢字が書かれており、漢字を使用する民族であることが分かった。モン族は10年ほど前に村ごとこの地に移転してきた。インフラの整っていない山岳地帯では十分な教育と医療を受けることができないが、町に近いところに移転することで、公共サービスを受け、豊かな暮らしができるようになることが移転の理由だったそうだ。しかし、人口の増加による焼畑面積の増加は、森林の再生を難しくし、焼畑の制限へとつながった。私たちが話を伺ったモン族のおばあさんは、娘が暮らすルアンプラバンへ引っ越すことを考えているそうだ。伝統的な暮らしは、その暮らしをすることが理に適っている土地で暮らすことで持続してきた。だから、伝統なのであろう。その土地を離れることで、暮らしは変わり、伝統は失われる。その代わりに利便性や教育、福祉、衛生といった公共サービスを得て、今までとは異なる視点での豊かな暮らしをするチャンスを手に入れることができる。どちらが幸福かは当事者でなければ分からず、個人によって千差万別であろう。しかし、選択する機会は万人にあるべきものである。村で出会った老若男女の笑顔がずっと続きますように。（松本隆史）

⑰ 学校図書室の地域への展開事業／NPO 法人ラオスの子ども ALC

本に囲まれると不思議に心が落ち着き、本を手にとるときは何だかうれしくなる。ALCにお邪魔したとき、そんな気持ちになった。しかし、ラオスの子どもたちは小学校入学まで本を手にとることは少なく、入学しても全員に教科書が行き渡るわけではない。また、家庭で学習する習慣がない子どもが多く、家の手伝いをする子どもが多いそうだ。多民族国家のため、使用言語が異なっていたり、口承文化で人から人へと口伝えで文化が伝承されてきたりしていることも、本に親しむ習慣がないことの原因だという。そんな子どもたちに図書館を提供し、毎年、本を補充する。本を読む楽しさを知ってもらうために、本の内容を劇化したり、多くの人の前で音読したり、紙芝居にしたり、授業の中で本を活用したり、図書委員を活動させたりする。図書担当の先生を研修し、自分たちの手で図書館を運営できるようにしているそうだ。そんな図書館が現在246館あり、

それらの図書館の草分け的存在のケオク図書館とケオク子どもセンターを見学し、子どもたちと交流した。子どもたちは純朴な笑顔と謙虚さで私たちと交流した。そこで思ったことは環境が子どもの人格形成に大きな影響を与えているのではないかということ。ラオスの農村にある「家族の絆」「コミュニティーのつながり」「自然の豊かさと自然崇拜」「物質の少なさ」が、そこで成長する子どもの人格を形成し、ラオス人気質を作っていると思った。一方、環境が子どもの人格形成に重要ならば、ごみ処分場で育った子どもはどんな人格になるのだろうか。また、我が国の都市部の環境は「核家族」「個人の生活」「自然の乏しさ」「物の豊かさ」といえるのではないか。さて、子どもの将来のためには、どんな環境を大人はつくるべきなのか。(松本隆史)

● ラオスの移動途中

ケオクへは、半分赤土半分舗装の道路を走った。まさにインフラ整備真っ最中を体感した。ビエンチャン周辺は1台のバス、ルアンプラバンからサヤブリーは2台のワゴンで移動したのだが、車窓から様々なものを発見。4人乗りスクーター、スマホいじりながらスクーター、傘さしスクーター、傘さしてあげるよスクーター等ラオス人の貴重な移動手段がスクーターであった。おいしそうなお店、面白い看板、そのどれも激写しようと奮闘した結果、1000枚以上の写真データを集めることができた。車中、様々な話をし合った。直前の研修の振り返りは勿論、将来のビジョン、社会問題、教育事情、恋愛事情、たわいもない冗談などバラエティー豊かな話を、バラエティー豊かなメンバーで楽しんだ。ガイドさんや通訳さんからもラオスについて様々なことを教えてもらった。メコン川での快適な船での移動も忘れ難い経験となった。(松本隆史)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [MTM_2318]

◇キャプション：開発と持続

◇解説文：

少数民族の村では、祖父・父等は山に畑仕事、祖母・母等は家事と内職、子ども達は大勢で自然の中で遊んでいた。なぜか、自分の幼いころが懐かしく思い出される時間だった。開発とは古いものを無くして新しくすることではない。ラオスのよさを持続させる開発を、我が国は国際社会と協調して、支援していく必要があると感じた。



●写真2…ファイル名 [MTM_2512]

◇キャプション：ぼくの居場所

◇解説文：

ラオスを南北に流れ、ラオスに暮らす人々に多くのものを与えてくれる母なるメコン川。父・船長、母・サポート、僕・サービス。仕事の後、やっぱり落ち着くのは父と母の間。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・栄養ドリンク剤を複数本と栄養錠剤が体調を崩した時に重宝しました。
- ・持ち物はよく吟味して準備すること。持って行ったけれど使わない、なぜ持ってきたのかわからない、なぜ持ってこなかったのか後悔することのないように、リストをもらったから準備を開始。後回しにすると追い込まれます。
- ・ビーチサンダルはホテルの部屋や、ちょっと散歩で重宝します。
- ・虫よけは必須。私はスプレータイプ2本使い切り、腰には電池式香取、就寝時は蚊取り線香で安心して眠れました。
- ・研修ですので、全ての訪問先へは襟付きのシャツで、襟を正して行く気持ちが大切です。足元は歩きやすい靴で大丈夫です。
- ・カメラの予備バッテリーは必須です。ただ、写真を撮りまくるよりは、よく見て・よく聞いたことや感じたことを、後から読める字できちんとメモしておく、後で活用しやすいです。

7. その他全般を通じての感想・意見など

- ・マナビノオト 万歳！！ NIED・国際理解教育センターの川合さんのスキルに感動です。
- ・すべての研修がつながり、海外研修へ流れ込みます。毎回の研修を大切に。

以上